

2019年12月03日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【ECB(欧州中銀)の金融政策】

来週の12月12日(木)に、ECB理事会が開催される予定です。

今年最後のECB理事会で、大いに注目しています。

+++++

前回開催されたECB理事会(10月24日)では、事前の予想通りに、政策金利の据え置きが発表された。

中銀預金金利はマイナス金利のままで、マイナス0.50%に据え置かれた。

そして、11月から月200億ユーロの資産買い入れを再開し、「必要な限り」継続することを発表した。

+++++

しかし、ECB内部では、ドイツ、オランダ、オーストラリアの中銀総裁から、資産買い入れ再開に反対の意見も出ている。

そして、前回のECB理事会(10月24日)は、ドラギ総裁にとって、最後のECB理事会であり、次期総裁のラガルド氏も出席した。

ECB理事会後の記者会見では、ドラギ総裁と次期総裁のラガルド氏が同席した。

ラガルド氏が、記者会見に同席したということは、次期総裁がドラギ総裁の政策を維持継承するだろう、つまり、金融緩和政策を維持するだろう、という憶測(思惑)が働く。

ラガルド氏の同席には、ドラギ総裁の意思が垣間見える、と判断しています。

+++++

資産買い入れ再開に反対意見を持っている国は、概して、欧州の中で、経済的に強い国であり、ECBは、それらの経済的強国に金融政策を合わせると、経済的に弱い国は、ますます危うい立場に追い込まれると判断しているのだろう。

そう考えると、ECBは金融緩和政策を維持する、という結論に至る。

+++++

ECB理事会当日（10月24日）のマーケット（外国為替市場）では、政策金利の据え置き発表直後は反応薄だったが、ドラギ総裁の会見後に、ユーロ／ドルは下落した。

つまり、ECBが金融緩和政策を維持することを、次期総裁（ラガルド氏）も確認したことが、「ユーロ売り」の材料になった、と考えます。

+++++

11月にはECB理事会が無かったので、来週の12月12日（木）に予定されるECB理事会が、今年最後の会合になります。

ラガルド新総裁が、ドラギ総裁の金融緩和政策を維持することを確認する会合になるだろう、と判断しています。

つまり、ECBの金融政策に大きな変更が無いことを確認する内容になるだろう、と考えています。

+++++

（2019年12月03日東京時間14：50記述）